

紙上法話

「牛と人とこの地域と」まち

広島県 萬福寺住職 高橋道英



平成二十五年、お寺の近くに若い夫婦が移住してきました。夫婦は牛を飼い、チーズを作って生活しています。目指すのは自然循環型の酪農です。牛が野山の草を食む。その牛のお乳を人が分けて頂き、それまで荒れていた野山も整備されていく。まさに牛と人と自然とが一体となった暮らしなのです。そして、色々な職業や生き方の人達が、互いに支え合う暮らしを願っています。

そんな暮らしのできる場所を探し求め、たどり着いたのが福島のいわき市でした。夫婦は、地域の協力が得ながら、その広い土地を牧場として整備していきました。夢に向かって一歩ずつ歩んでおりました。しかし、その暮らしは平成二十三年三月十一日を境に一変しました。東日本大震災。東京電力福島県第一原子力発電所の事故により漏れ出した放射能、その土地での牛の放牧はできなくなりました。飼料を使えば酪農を続けることも可能でした。しかし「安心して食べる事ができる物を作りたい」という思いで、新たな土地を探し始めます。そして様々なご縁で決まった新しい移住先が庄原市口和町だったのです。地域の人達は若い夫婦と牛たちのために土地を準備し、家を準備し、快く迎えてくれました。それから十年、夫婦

は三人の子どもを授かり、今では地域にとって欠かすことのできない存在となっています。

瑩山禪師は「たとえ難値難遇の事有るも、必ず和合和睦の思いを生ずべし」と示されています。それはどんな苦難に出会っても、和合和睦の思いを心がけるべきという意味です。東日本大震災は、この夫婦にとって大きな苦難でした。又、私達にとっても、とても大きな悲しい出来事でした。それでも多くの人が手をとりあい、一つとなり、相和することにより、復興への道を一歩ずつ進むことができています。原発事故以来「フクシマ」というだけで、多くの人が誹謗中傷を受け、心ない言葉をかけられてきました。そんな時に地域の人は快く迎え入れました。これこそ瑩山禪師の思いの実践なのです。分かち合い、支え合い、思いを重ね合って、人と人との繋がりを深めていく、これを仏教では「同事」といいます。そして、この夫婦の理想とする、自然と私たち人間とが共に生きる、これこそが大いなる同事の生き方なのです。